

## 事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)	
松本 祐生子	
2. 研究または活動のテーマ(課題名)	
独ソ戦下のソ連女性: 身体と感情	
3. 助成額	
450,000 円	
4. 実施期間	
2018年4月 ~ 2020年3月	
5. 実施状況	
<u>2018年4月~2018年8月 渡航前</u> ・留学関連の事務手続き ・先行研究の整理 ・ゼミへの参加 ・研究会での報告	
<u>2018年8月~2019年6月</u> サンクト・ペテルブルク国立大学へ留学 〈東京大学全学交換留学プログラム(2018-2019年期)〉 ・サンクト・ペテルブルクでの史料調査 ロシア国民図書館(РНБ) サンクト・ペテルブルク中央国立科学技術文書館(ЦГАНТД СПб) サンクト・ペテルブルク中央国立映像写真音声文書館(ЦГАКФФД СПб) サンクト・ペテルブルク中央国立文書館(ЦГА СПб) サンクト・ペテルブルク中央国立歴史政治文書館(ЦГАИПД СПб) ・モスクワでの史料調査(2018年11月) ロシア連邦国立文書館(ГАРФ)、ロシア国立社会政治史文書館(РГАСПИ) ロシア国立図書館(РГБ)、歴史図書館(ГПИБ) ・サンクト・ペテルブルク国立大学歴史学部の講義の受講 講義「大祖国戦争期のレニングラード」、「20世紀の前線と後方における軍事的な日常生活」	
<u>2019年7月~2020年3月 帰国後</u> ・論文の執筆、投稿 ・西洋近現代史研究会10月例会での発表(予定)	

## 6. 事業成果と自己評価

本研究は、独ソ戦期のソ連女性に関する分析を通じて、当時の社会状況を解明することを目的とする。ロシア第二の都市、 Санкт・ペテルブルク(旧レニングラード)への渡航を経て、独ソ戦における数多の戦闘の中でも、特に、レニングラード包囲戦を取り上げることにした。そのうえで、申請書の計画通り、女性の身体に焦点をあて、史料を調査した。

先行研究の調査は、ロシア国民図書館(РНБ)で行い、ロシア語文献を閲覧することができた。1941年から1944年にかけて、レニングラードはドイツ軍の包囲下に置かれ、深刻な飢餓を経験した。女性は、前線に行った男性に代わって、都市の防衛、工場での労働、破壊された街の清掃を担った。若い女性は前線に赴き、武器をもって戦うこともあった。従来の研究で、このような女性たちの行動は、祖国のための英雄的な活躍と位置付けられ、プロパガンダで称賛されたことが明らかにされている。戦後の女性については、家族法などの法制度や社会保障に焦点を当てた詳細な研究が存在している。

文書館での調査は、 Санкт・ペテルブルク国立大学歴史学部から紹介状を発行していただき、入館許可を得た。主に、 Санкт・ペテルブルク中央国立科学技術文書館(ЦГАИТД ЦПБ)所蔵の医療関係の史料を調査した。いくつかの研究所による調査結果の報告を閲覧することで、戦時の過酷な環境と激務の結果、女性の身体には、従来見られなかった規模で様々な症状が出たことが明らかになった。さらに、戦後の荒廃の中で、女性の状況を改善するために、医療機関は様々な施策を計画し、実行するよう努めていたことも窺えた。ここには、プロパガンダが伝えるような英雄の物語ではなく、戦時の傷を抱えて戦後も生きていた人々の姿が表れているといえよう。

統計については、 Санкт・ペテルブルク中央国立文書館(ЦГА ЦПБ)、 Санкт・ペテルブルク中央国立歴史政治文書館(ЦГАИПД ЦПБ)、写真史料は Санкт・ペテルブルク中央国立映像写真音声文書館(ЦГАКФФД ЦПБ)において、調査を行った。現時点で閲覧が許可されない文書も多く存在し、調査上の制約があった。感情面については、文書館の史料を調査する予定であったが、ロシア国民図書館(РНБ)に豊富に所蔵されているレニングラード包囲関連の文献を用いて、取り組むことになった。

講義の都合上、モスクワでの史料調査は当初の予定より回数を減らさざるを得なかった。モスクワでの調査期間は2週間程度にとどまったものの、歴史図書館のカードを作ったことで、オンライン史料の閲覧が可能になった。モスクワの文書館事情を知ることができたという点でも、今後の研究にとってきわめて有益な滞在になったと考えている。

講義については、当初受講を計画していたジェンダーに関する講義が歴史学部で開講していなかった。その代わりに、「大祖国戦争期のレニングラード」、「20世紀の前線と後方における軍事的な日常生活」を受講した。講義への参加を通じて、独ソ戦とレニングラード包囲にとどまらず、日露戦争期や第一次世界大戦期を含む広範な戦争社会史を学ぶことができた。

先行研究は戦時下の女性の性について、男性や体制との関係性の中で論じるものが多かった。それに対し、本研究は戦時中の女性の行動に着目し、彼女たちの身体状況が戦後の社会にもたらした影響を考察する。医療関係の文書を使用することは、近年発展したLGBT研究の手法を参照したものであり、この点について申請時の計画から変更はない。

2019年7月現在、文書館で得た史料を読み、論文の執筆に取り組んでいる。戦後の社会で過半数を占めた女性に焦点を当てることによって、独ソ戦が戦後の社会にもたらした影響を広く考察する。ひいては、戦時下の人々がどのように生きたのかという普遍的な問いに答えることを目指す。上記の内容について10月に西洋近現代史研究会で報告を予定している。

## 7. 提出成果物

- ・西洋近現代史研究会で発表予定の原稿のコピー
- ・論文「独ソ戦下のソ連女性(仮)」のコピー(予定)